

日本語対応手話

—— 漢字手話を中心に ——

私たちが現在研究を進めている
日本語対応手話の概略を紹介します

日本語対応の手話とは
音声や文字で表現されている日本語を
手指及び口形によって表示するものです

日本語対応手話は、文法・語彙その他の面で
日本語と対応する手話を作成することによって
聾教育や社会生活での
手話の有用性を高めることを目的としています

今回は、漢字手話を中心にパンフレットを作製しました
漢字手話とは、漢字を手話で表そうという試みです
実例をご覧ください

1987年10月

伊藤 政雄 竹村 茂
唯野 玲子 平 美穂子

日本語対応手話

1 日本語対応手話とは

日本語対応手話とは、日本語を音声や文字によらないで、手指および口形によって表示したものです。(ただし、音声は併用することを原則とします。)

2 教育の場では

- (1) 口話と併用しやすい手話であること、併用することによって、口話だけ、手話だけのときに比べ、より分かりやすくする
- (2) 日本語を手話で正しく表現できるようにする。そのことで、手話が日本語の習得に役立つようとする
- (3) 教科学習などに用いて、伝達効果をあげることなどを目的にしています。

3 聴覚障害者の社会生活では

昔から使用してきた手話（口話併用を条件とせず、日本語の文法によらない表現形式を含む手話）との役割分担を図ります。

どちらかといえば、放送や研究会などの日本語の表現に依存する度合の多い場面で使用することを目的とします。

（注1）現在、成人聴覚障害者のコミュニケーションでは、口話を併用し、日本語の語順に手話を配列し、付属語などは口形で示す表現形式が多くなっています。これは、日本語対応の手話と考えられます。この形をより練り上げていこうとするものです。

（注2）日本語対応ではない表現形式の手話（伝統的手話の一部）も、聴覚障害者の生活の中で役立っており、共存すべきものと考えます。

4 一つのモデル提案として

言語は日常生活に根差していますから、早急な改革は困難だと思います。といって、手話の発展は自然の成り行きにまかせればよいというものではないと思います。聴覚障害者をとりまく生活環境の変化は、手話に何らかの改善を求めています。

私たちは、その改善を目的として、上記の考え方をもとに研究をすすめています。

また、『日本語対応手話辞典』の編纂・作成を企画するとともに、聾教育の場でも日本語対応手話が使用できるように日本語対応手話のテキスト作成の準備も始めています。

漢字手話

1 漢字手話の有用性

日本語を手話で正確に表現しようとする場合、1単語に対し、1つの手話を対応するのが望ましいと思われます。しかし、日本人（成人）の理解語彙数は、平均5万語前後と言われ、その5万語のことごとくに対応した手話を創り出すのはまず不可能ですし、記憶の負担も大変です。そこで、日本語は漢字と仮名の組合せによって表記されるという点に着目し、漢字に対応させた手話を創るという方法を考えてみました。

漢字を手話で表すことができれば、いろいろなメリットが生まれます。

まず、日本語は漢字の熟語が非常に多いので、漢字手話をつくれば、その漢字手話の組合せで、いろいろな漢字の熟語が表せます。例えば、『事』と『物』という漢字手話を組合わせて『事物』という熟語をつくることすれば、次に『品物』や『事実』という手話をつくるときに『事』や『物』の漢字手話が利用できます。

また、日本語の単語ひとつひとつに手話をつくった場合に比べ、漢字手話なら覚える手話の数が少なくてすみますし、手話から漢字を想起し、その漢字から意味をつかむなら、特に抽象性の高いことばの場合、意味の明確化に役立ちます。

2 常用漢字の漢字手話

私たちは現在、常用漢字の漢字手話化の作業を進めています。常用漢字は1945字あります。使用頻度の少ないものは手話化する必要はありませんし、異なる漢字でも意味が近い場合は同形の手話で表せるものもありますから、すべての常用漢字を手話化するという訳ではありません。また昔から使用されてきた手話で、そのまま漢字手話として利用できるものも、できるだけ尊重しました。それらを含めて約1500字を試みに漢字手話にしてみました。その全部を紹介することは不可能なので、ここでは漢字手話の例をいくつか紹介します。これらの手話はいずれ『日本語対応手話辞典』として刊行する予定です。（具体的な例は4ページ以降を見てください。）

3 漢字手話作成の方針

(1) 原則

- i 1漢字は1手話とします。
- ii 漢字手話の手の形は漢字が示す意味全部を表示するようにします。

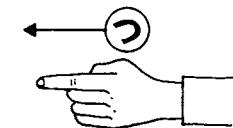
(2) 例外

- i 指文字を使用する漢字手話は、音読み・訓読みそれぞれに応じて指文字部分を変えて表現します。但し、音・訓は常用漢字として認められている範囲内とします。
- ii 音と訓の違い・音の違い・訓の違いで漢字の意味を明確に区別できるときは、それぞれ別に手話をつくることもできます。
- iii 二つ以上の漢字が同じ訓読みを持つ場合は、音訓ともに意味が同じか似ている場合は同じ手話とし、意味がはっきり異なる場合は別の手話とします。

＜音読み・訓読みそれぞれを指文字で表現し分ける例＞

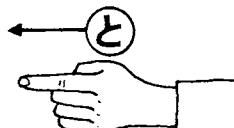
例 『通』

「ツウ」と読む場合



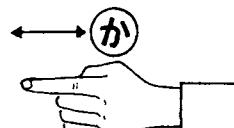
左手人さし指の上を「つ」でなぞる。

「とおる・とおす」と
読む場合



「と」でなぞる。

「かよう」と読む場合

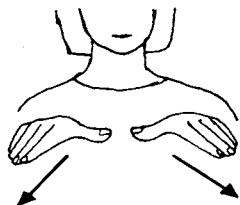


「か」で往復させる。

＜音と訓の違い・訓の違いで意味を明確に区別できるので別の手話をつくる場合＞

例 『治』

「おさめる・おさまる・ジ・チ」と
読む場合



手のひらを下に向けた両手を
開きながら下へ。



両手を手のひらを向かい合せにして、
交差させて重ね、右手を裏返す。



4 漢字手話の使用法

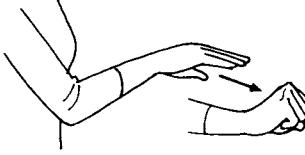
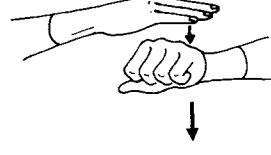
すべての漢字熟語を漢字手話で表す訳ではありません。次のような手話は漢字手話の組み合せがよいと思います。

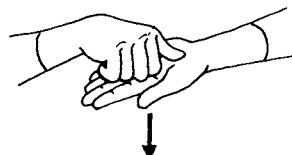
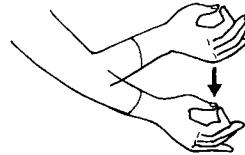
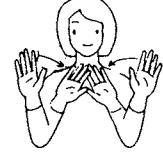
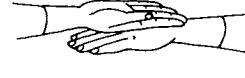
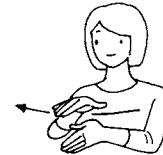
その漢字熟語を表す手話がなく、漢字手話の組合せでも違和感のないもの。

逆に言えば、一語感の強い漢字熟語は漢字手話で表すのではなく、一つの新しい手話を考えた方がよいと思います。例えば、「先生」とか「意味」などの語を手話化するときは、「先」と「生」、「意」と「味」などの漢字手話の組合せでは違和感がありますので、「先生」・「意味」の手話を新しく一語の手話として作成します。

漢字手話の例

私たちが作成した漢字手話の一覧表の例を紹介します。常用漢字を音読みで並べた場合の最初の12個を例としてあげてみました。

漢字	音 訓	手 話 図 像	動 作 方 法 の 解 説
亞	ア		両手を指文字「あ」の形にして並べ片手を下げる、「準ずる」「次ぐ」の意味を表す。
哀	アイ あわれ あわれむ		手のひらを左胸につけて、「哀悼」の意味を表す。
愛	アイ		左手の甲を右手の手のひらでなでる。「わたしたちの手話5」の「愛」を使う。
悪	アク オ わるい		人さし指で鼻先をなでるように横切らせる。「わたしたちの手話1」の「悪い」を使う。
握	アク にぎる		指先をすぼめるように開いた手を斜め前下へ押し出しながら握る。「わたしたちの手話8」の「把握」の右手だけを使う。
圧	アツ		左手を握り拳にして、右の手のひらで圧力が加わったようにおさえつける。

漢字	音 訓	手 話 図 像	動 作 方 法 の 解 説
扱	あつかう		両手の指先を前方に向け、まるみをつけた手のひらを向かいあわせ、交互に上下に動かす。
安	アン		<音読みの場合> 左の手のひらに右手を指文字「あ」の形にして置き、安定するよう下へおろす。
	やすい		<訓読みの場合> 右手をお金の形にして、下へさげる。「わたしたちの手話1」の「安い」から。
暗	アン くらい		手のひらを前に向けた両手を顔の両側に置き、顔の前で交差させる。「わたしたちの手話1」の「暗い」から。
案	アン		指文字「あ」をこめかみにあて、はじくように前へ出す。
以	イ		指先を互い違いに向けた両手の甲をつけあう。
位	イ くらい		左手を手刀の形にして胸の前へ置き、その上を右の手のひらで撫でるように動かし、「地位」の感じと「程度」の感じを含めて表す。

漢字手話による複合語の例

次に、漢字手話から複合語をつくる例を紹介します。漢字手話の一覧表のイラストとここにあるイラストの組み合せになります。

亜→亜流

イラスト：「流」



ものが流れていくようす

日常使う語としては「亜流」ぐらいですが、教科の勉強のとき、理科で「亜硫酸」、地理で「亜熱帯」、生物で「亜目」などを表すときには使います。

哀→哀愁

イラスト：「愁」



手のひらを上に向けた右手の小指側を胸にあて下へおろす

哀→悲哀

イラスト：「悲」



涙の流れるようす

愛→愛憎

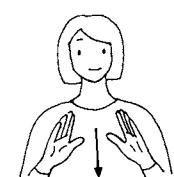
イラスト：「憎」



指先を曲げた両手を胸の所で上下させる

愛→情愛

イラスト：「情」



親指を胸につける

「情愛」という手話を逆の順でやると「愛情」ということばが表せます。従来の手話では「情愛」と「愛情」というような微妙なニュアンスの差のあることばを表現し分けるのは難しいことです。

悪→悪事

イラスト：「事」



指文字「こ」

悪→憎悪

左上のイラスト：「憎」と組み合せれば、「憎悪」という複合語が表せます。

握→握力

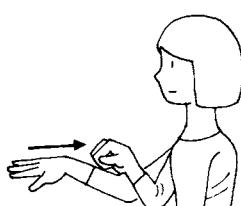
イラスト：「力」



力こぶを示す

扱う→取り扱う

イラスト：「取る」



開いた手を引きながら握る

安→安心

イラスト：「心」



人さし指で腹を指す

握→把握

漢字手話では「把」の手話も、「握」の手話も同じ形になりますので、この場合は「握」の手話で「把握」の語を表すことになります。もともと「把握」という熟語の構成法は、同じ意味の漢字を二つ並べたものですから、一つの手話で代表させても差し支えないと考えています。

「扱」は常用漢字音訓表では音読みは認められていませんので、漢字熟語（複合語）はありませんが、複合動詞も複合語に準じて扱います。

安→不安

イラスト：指文字「ふ」



漢字「不」は指文字「ふ」で表す

暗→暗黒

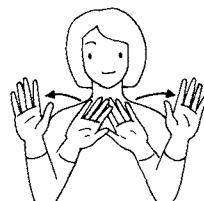
イラスト：「黒」



髪の毛の黒さを示す

暗→明暗

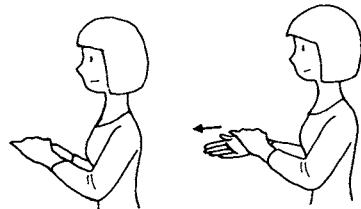
イラスト：「明」



目の前が開けたようす

案→案出

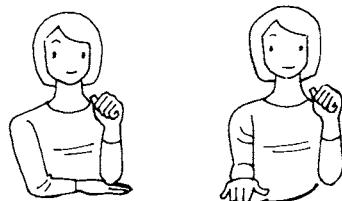
イラスト：「出」



左手の下から右手を前に出す

案→原案

イラスト：「原」



左手の肘の下に右手の甲をあて
右手で前方に水平に円を描く

以→以内

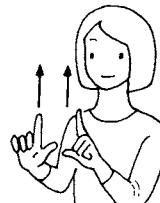
イラスト：「内」



左手の内側を右手人さし指で
指し示す

以→以東

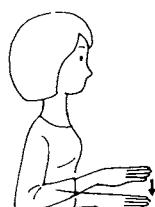
イラスト：「東」



両手で太陽の昇るようすを示す

位→位置

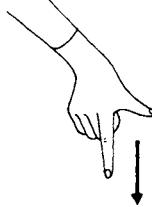
イラスト：「置」



からだのわきで抑えつけるように

位→下位

イラスト：「下」



「下」の漢字手話は字形写像

日本語対応手話による「文」の表現

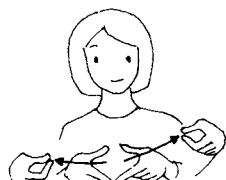
日本語対応手話を使うと、抽象的な文章も表現しやすくなります。その例として、日本国憲法前文から一つの文を取り上げてみました。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。」

＜手話表現上の約束＞

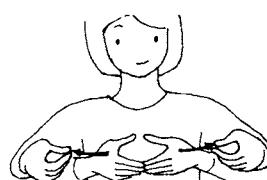
- i 「 」は1手話を表します。
- ii ()は指文字と口形で表示しますが、指文字は省略しても差し支えありません。
- iii []は動詞、形容詞、形容動詞の活用語尾を示します。活用語尾は命令形以外は原則として表示しません。

「日本」



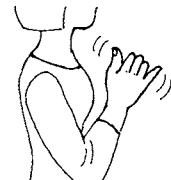
親指と人さし指で、
日本列島の形を表す

「国」



指は全部伸ばして

「民」



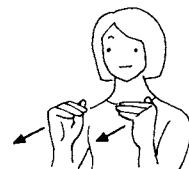
漢字手話「人」の同形語

(「は」)



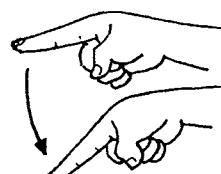
指文字「は」

「恒久」



漢字手話「恒」の同形語

(「の」)



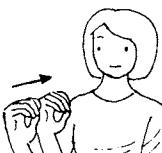
指文字「の」

「平和」



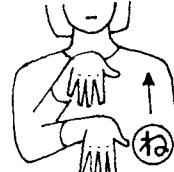
漢字手話「平」の同形語

(「を」)



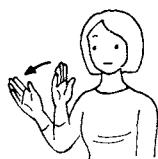
指文字「を」

「念」



指文字「ね」を上へあげる

「願〔し〕」



片手でお願いする形

「人間」



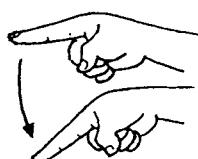
漢字手話「人」の同形語

「相互」



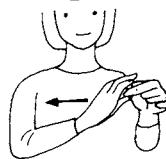
漢字手話「互」の同形語

(「の」)



指文字「の」

「関係」



親指と人さし指でつくった
両手の輪をむすぶ

(「を」)



指文字「を」

「支配〔する〕」



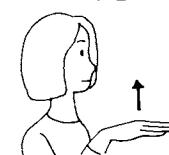
左手指文字「た」の前に
右手指文字「し」をおき、
右手を斜め前に下げる

「崇」



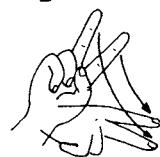
従来の「尊い」の手話

「高〔な〕」



手を上へあげる

「理」



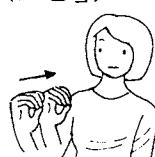
指文字「り」

「想」



指文字「そ」をこめかみに
つけ水平に円を描く

(「を」)



指文字「を」

「深〔く〕」



両手の手のひらを向かい
合せ右手を下へおろす

「自」



人さし指で自分を指し上へ
はじくように上げる

「覚〔する〕」



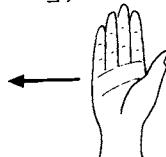
指文字「か」をこめかみに
つける

(「の」)



指文字「の」

(「で」)



指文字「で」

「あっ」



「ある」の手話

(「て」)



指文字「て」

「平和」



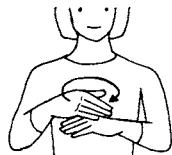
前出

(「を」)



指文字「を」

「愛[する]」



左手の甲を右の手の
ひらでなでる

「諸」



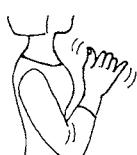
従来の「いろいろ」の手話

「国」



前出

「民」



前出

(「の」)



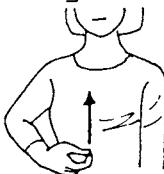
指文字「の」

「公」



字形写像の漢字手話

「正」



つまんだ手を上に
あげる

(「と」)



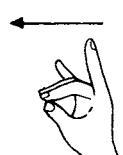
指文字「と」

「信」



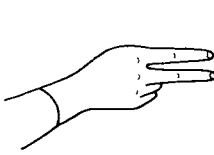
両手を指文字「し」にして
胸の前でかさねる

「義」



指文字「ぎ」

(「に」)



指文字「に」

「信頼[し]」



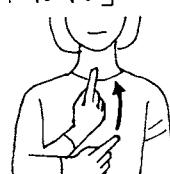
漢字手話「信」の同形語

(「て」)



指文字「て」

「われ」



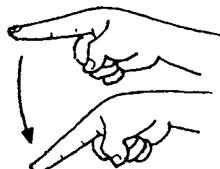
前出「自」に同じ

「ら」



「みなさん」の手話

(「の」)



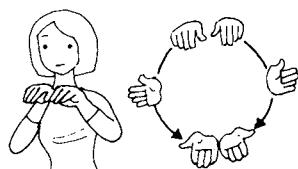
指文字「の」

「安」



左の手のひらに右手指文字
「あ」を載せ下へさげる

「全」



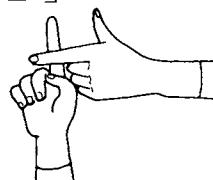
両手で円を描く

(「と」)



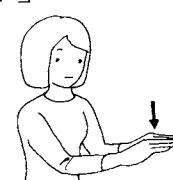
指文字「と」

「生」



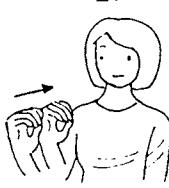
字形写像の漢字手話

「存」



両の手のひらで抑えるよう
に

(「を」)



指文字「を」

「保」



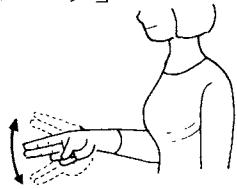
左手人さし指を右手
指文字「ほ」で囲む

「持[し]」



開いた手を上にあげながら
握る

「よう」



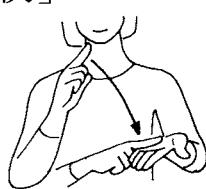
指文字「は」を前方で
上下に振る

「と」



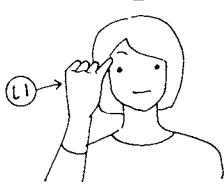
指文字「と」

「決」



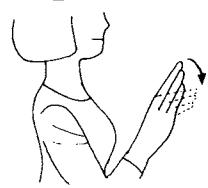
左の手のひらに右手の
人さし指を打ちつける

「意[し]」



指文字「い」をこ
めかみにつける

「た」



指をわずかに前へ
倒す

このパンフレットは、
右ききの人を前提に
して説明しています
が、左右の手が逆に
なっても差し支えあ
りません。

本研究は手話コミュニケーション研究会がトヨタ財団の
研究助成を受けて行っている研究成果の一部です。

「日本語対応『手話辞典』編纂作成のための総合研究」

1985年度（助成番号85-III-016）

本研究に関するご意見・お問い合わせは下記まで手紙でお願いします。
